

意見陳述書

2013年6月7日

佐賀地方裁判所 御中

住所 佐賀県武雄市

氏名 多郎浦 和子

この様な神聖な場におきまして、代読をお許し下さり感謝します。

先ずは、障害者代表として意見陳述をさせていただき私自身の身体の状態から説明させて戴きます。

私は幼い時高熱により運動神経が麻痺してしまったため「脳性麻痺」と診断を受けました。脳性麻痺と言っても、脳の犯された部分によって障害の程度も異なります。

私の場合は歩く事も、立っている事も、寝返りすら思う様に出来ない状態です。

話そうとすると、自分の意志とは逆に身体が反応し声が出せなくなります。

特に話そうと思えば思うほど、全身の筋肉が硬直し呼吸をするのがやっとなんかという状態になります。

この様な重い障害者の私が、2010年の当初から、「玄海原発プルサーマル裁判の会」の皆様と共に、何故、雨の日も風の日もめげること無く裁判所に通いつけているのかを今日はお話させて下さい。

二十年程前までは、殆どの重度障害者は施設生活でしたが、平成15年4月施行の「支援費制度」を糧とし、佐賀県も例外なく、希望に満ちた在宅生活を多くの障害者や老人の方が家族と共に地域で送れるようになりました。

もちろんこれまでは、お年寄りや訪問介護のヘルパーを門前ばらいするし、重度障害者は施設から出る事を親に反対されるしで、在宅で訪問介護を受けるのは無理かと思った時期もありました。

けれど今では車椅子のお年寄りや様々なハンディを持つ若者達が、ごく普通にすれちがい、挨拶を交わし譲りあえるコミュニティ溢れる社会となりました。

きっと福島の方々も原発事故前は同じ様にお年寄りや様々なハンディを持つ人びとが家族や地域の人たちと過ごされて居た事でしょう。

けれど原発事故後、多数の福島の方々には、まだまだ仮設生活にて過ごされておられます。

また、お年寄りや障害者は未だに、病院や施設での生活を送られていると聞きます。

同じハンディを持つ者として、私が何より心配する事は、避難された障害者の方達は、住み慣れた自宅でもなく、使い馴れた寝具も無い不便な生活を強いられ、どんなにか精神的にストレスを感じておられている事でしょうか。

私と同様な重度障害者や特に高齢者が、長期避難を求められることは死を意味します。

体力的な問題や、それ以上にコミュニケーションが取れず、生きる意欲を失うからです。

そんな辛い被災者の方々の心の中にある故郷に戻れない怒りや悲しみを、原子力発電所が有る地域の私達が受け入れ、二度と同じ過ちを起こさない事と思うのです。

また私の街でも、原子力事故の玄海町からの避難訓練が行われていたので、最寄りの役場へ電話で「車椅子の方も参加されてますか？」と聞いてみましたが、障害者の方は参加されていませんとの事でした。

それでも、玄海町の方がせっかく近くの体育館へ来られるのだから、一目でもお会いできたらと思い、その予定表を確認したところ、体育館へは30分のトイレ休憩だけでした。

後はほぼ観光地巡りの予定表だったので、これでは車椅子や足の悪い人の参加は無理で、避難訓練とは形ばかりだと悟りました。

障害者は通常風邪をひいただけでも、訪問介護や施設も病院さえも受け入れてくれる所が見つからない現状なのです。だから、障害者にとって自宅からの退去は砂漠へ置き去りにされると同じことなのです。クッションひとつが一晩なくても、痛みで眠れず、褥瘡（じょくそう）が出来てしまうのが重度障害者で、重いハンディを持つ者の多くの人は避難したくても出来ないのです。

ですから、重度障害者や老人は、戦時中の様な避難を強いられることのない、我が町我が家で平和な暮らしが願いなのです。

それでも、産業発展のために危険性を覚悟の避難訓練ならば、人災は天災と違い予想が立てられます。先ずは未来を担う若者たちの健康と遺伝子だけでも、確実に守れる保障と被曝の賠償を決めたいと、九州電力と国民個人個人と契約を交わせたらと切に願います。

どうか人災による避難訓練などしないでも良い配慮をお聞き入れ下さい。

また日本は唯一、人類初の原子爆弾投下と言う被害を受け苦しんだ被爆国で、また様々な公害をも多く経験してきた国でもあり、この半世紀、人災による被害は数えきれなく有ります。

代表的なものとして1955年森永ヒ素ミルク中毒・1956年水俣病と、それに1960年代には石炭によるばい塵・じん肺・煙公害が問題視されてきました。

石炭から石油エネルギーへと転換し、また第二次エネルギー革命へと向かい、日本の経済発展のためと信じた、勤勉な労働者たちは何度となく被害を受け苦しみました。

けれどそれ以上に、原子力発電所がいかにも恐ろしいか、福島原発事故を体験した、日本人ならば、福島の悲しみと、これから苦しむであろう被曝病を忘れてはならないと考えます。

また人災と言える原発事故は、今までの公害と比べようも無い遺伝子にまでも被害を刻むものです。

なのに、原子力発電所と言う平和利用の名の下、電気料金と引き替えに再稼働しようとしています。これ以上使用済み核燃料を未来に残してはいけません。

今、私達の生活基準を節電で下げたとしても、子ども等の健康だけは守り抜かなければと想うばかりです。

チェルノブイリ原発事故後、1990年頃から子ども達の間で甲状腺ガンが急増しました。また放射能の影響を受け生まれてきた子ども達の多くは奇形児として過酷な人生を送られています。どうか未来の日本の子ども達にハンディを背負わせないで下さい。

重度のハンディを持つ私が切に願う事は、産まれ来る子ども達の五体満足なのです。

それに汚染の無い大地さえあれば、住み慣れた人々とのコミュニティを復活させられます。けれども、人災による原発事故は戦争と同じく領土を失い、永遠に避難者となるのです。それでも生きていける保障を九電に願いたく想います。

とくに重度の障害者や高齢者は、クッション一つ在るか無いかの些細な環境の変化にも対応できません。弱者にとって長期避難は拷問による死と同じなのです。

どうか、障害者であろうと無かろうと、我が国の誇る憲法のもと皆の健康を守って下さい。